

工藤庸子著

『ヨーロッパ文明批判序説』

植民地・共和国・オリエンタリズム』

評者：佐伯 哲朗

(1)

本書は、従来、文学、特に恋愛小説を専門とする著者が、ある意味では、「時代の要請に応えよう」として書き上げた本である。その要請とは「たとえば歴史学との対話が可能になるような、開かれた文学研究をめざすこと」であり、本書のねらいを一言で言えば「アジアの一角に身をおいたヨーロッパ文明批判の試み」である。「序説」を名乗る本書は、「ヨーロッパ文明」について、1870年代までのさまざまなレベルの言説を歴史的に再構成しようところみる。著者が本書で考察の素材とするのは、「近代フランスを中心とした小説作品や旅行記、歴史学・宗教史・民族誌などの領域の著作や論文、それに同時代の大辞典などである」。

本書の構成は、次のようになっている。

はじめに

第 部 島と植民地

- 1 1870年代の地球儀とポリネシア幻想
- 2 「絶海の孤島」から「愛の楽園」まで
- 3 黒人奴隷と植民地
- 4 フランス共和国の奴隷制廃止派たち

第 部 言説としての共和国

- 1 国境の修辞学 - ミシュレの方へ
- 2 「ナショナル・ヒストリー」から「国

民文学」へ - ヴィクトル・ユゴーを求めて

- 3 共和国の辞典 - ピエール・ラルースをめぐる

第 部 キリスト教と文明の意識

- 1 知の領域としてのオリエン
- 2 セム対アリア
- 3 記述されたイスラーム世界
- 4 非宗教性の時代のキリスト教

著者の関心は、「欧米の原理が世界を席卷するグローバル化の時代にあって、その一元的な支配の淵源をさぐる」ことにある。1870年代までという点については、著者にとって「1870年代は、フランス語文献をよみながら『文明』について考える者が、たえず立ち返るべき基点の一つ」だからである。

著者は、言う。「近代ヨーロッパが、新しい宗教のありようを模索し発見していった、その経緯と結論が、地球規模の政治と宗教の関係を、今日にいたるまで規定しているのではないか」。

著者によれば、現代世界の危機を「文明の衝突」として捉えることは「今や常識的といえる見方」になっている。これ以上の「衝突」を希望しないとしても、「ヨーロッパ文明」を考察する必要性は高まりこそすれ、低下するものではないであろう。「ヨーロッパ文明」を問題にする本書の意義は、少なからぬものがあると思われる。

(2)

次に各章の内容を紹介したいところであるが、本書の叙述の仕方からして（もちろん評者の理解力の問題もあるが）、内容の詳細な紹介は不可能である。そこで、評者が重要な筋であると考えたことを以下にまとめておきたい。

特定のトポスの文化的な意味は、地球上の他地域との差異を前提としていわば相対化のシス

テムのなかで形成される。18世紀後半にフランスは植民地を領有したが、植民地を背景に、「野蛮」と「文明」との対立が存在した。「野蛮」は、極端な表象としては「食人妄想」に体现された。

白人の身体は、「美」と「真」と「自然」を体现し、唯一の規範として文明の頂点に立つことになる。黒人を底辺に、白人を頂点におく人種のヒエラルキーという見取り図は、ピュフォンにおいて「学問」の言説として明文化された。

欧米諸国の推進した奴隷制は、新大陸発見につづく絶対君主制時代の海外進出に構造的に組み込まれ、ヨーロッパの奴隷制は、国王の名による植民地建設に伴って成立した。1848年、2月革命によって第2共和制が成立した直後、奴隷制の廃止が決定された。シェルシェールによって奴隷制を許容するイスラーム文明の告発と、ヨーロッパの担う「文明化の使命」という大義名分とが結びついた。自国の抱える奴隷制という後ろめたさから解放された共和主義者たちは、アメリカをはじめ、奴隷制を許容する国々に、正々堂々と「自由・平等・友愛」を説くことができた。イスラーム世界とブラック・アフリカに関するかぎり、奴隷解放は、19世紀後半の本格的な植民地主義を正当化する名目となってゆく。

共和国フランスは、国内の制度については「非宗教性」の原則をかけたが、しかも他方では「キリスト教文明」の一員というアイデンティティを全世界に向かって誇示した。ヨーロッパが「文明化の使命」を唱えるときに、自明のこととして「文明」とは「キリスト教文明」を指していた。「狂信」と「独裁」と「野蛮」の温床であるイスラームという定式は、19世紀初頭、ナポレオンのエジプト遠征あたりから、徐々に流通しはじめた。そのイスラームとの対比のな

かで、「キリスト教文明」は顕揚され、新しい人種イデオロギーと協同し、抵抗なく植民地主義的な言説に合体していった。

近代国家の国境画定は、隣接する国家との差異という観点からなされるのであり、そのとき「内部」のアイデンティティを語るものが急務となる。そこで19世紀フランスの国民的と呼ばれる作家や歴史家や思想家は、こぞって「国民性を語る」という責務を果たした。共和国の意識は、最終的に匿名の大衆によって共有されたとき、はじめて「国民国家」を支える力となる。19世紀前半、草創期の「歴史」はフランス国民の起源について雄弁に語り、アイデンティティの創出に貢献した。第3共和制は「大学」という制度のなかに、フランス革命の遺産を正式に相続する場を設けた。ディシプリンとしての歴史学は、統一された公認の知識を累積し伝達するシステムを作り上げた。

第3共和制の教育構想を一身に体现し、じっさいにフランス国民が制度的な誘導も受けながら、ほかのいかなる作家にもまして愛読しつづけた「国民的作家」とは、ヴィクトル・ユゴーであった。第2帝政期のユゴーは、亡命の地からフランス国民に向けて、いや人類全体に向けて、文明と歴史への信頼を語りつづけた。「野蛮」から「文明」への絶えざる前進ないし上昇として「歴史」を捉える彼の姿勢は、ヨーロッパ近代の本質をなす。ミシュレもルナンも、同質の文明観を分かち合っている。第2帝政の亡命者というユゴーの立場は、ある意味で特権的だった。フランスにおける新世代の長く尾を引く挫折のプロセスを、彼は必ずしも共有しなかった。「文明」と「ナショナル・ヒストリー」への信頼を保ちえたのは、そのおかげもあった。人類の普遍的な「倫理」をかけたが、いわば停止した時間のなかで、ユゴーは30年前の青年の夢に向き合っていた。

辞典ラールスは諸宗教のなかのキリスト教という論点を提示した。その論点は、地理的・歴史的なベクトルを導入し、ユーラシア大陸と地中海を含む広大な地域を視野に入れることを促した。そしてキリスト教の優位性、あるいはキリスト教世界の優位性を論証する機会をもたらした。こうして人類の進歩という大儀に与し、近代的な文明の論理に荷担するキリスト教という発想が、あらたに誕生する。

啓蒙の世紀を通じて徐々に進行していた非宗教化の動きは、キリスト教とイスラームの対立という図式の有効性を、すでに減少させていた。そんなときに、物質的・技術的な側面においてヨーロッパがイスラームに対し圧倒的な優位に立つという自覚から、「オリエントの停滞」という共通理解が生まれた。これを解明する過程で、ヨーロッパが「進歩」の担い手とみなされ、その鍵となる「理性」という価値が称揚された。大航海時代以来の「新大陸」対「旧大陸」という図式が、「オリエント」対「オクシデント」という図式に切り替えられた。「オリエント」対「オクシデント」という新しい対立は、地理的に固定された分割にとどまらず、ダイナミックな歴史観によって再統合されながら、地中海をかこむトポスとして記述されてゆく。

19世紀における人文諸科学(文献学、歴史学、宗教学、神話学、考古学、人類学、等々)の発展とあいまって、おのずと確定されていった「オリエント」なる空間は、じつは時間的にも空間的にも、キリスト教世界として最終的に確定されたテリトリーに対し、その外部と同定できるようなトポスである。

啓蒙の時代の形態的な人種論においてもすでに、アフリカの黒人や植民地の先住民が明らかに劣った人種とみなされていた。啓蒙の世紀における「文明」の概念は、いわば相対主義的な視点をかかえこんでいた。遠い植民地の島々が、

ユートピアでありえたのは、文明の不在という主題が、たんなる欠如にとどまらず、ヨーロッパ文明の自己批判を導く契機となっていたからだ。

もともと神学や教会と無縁なところで育まれた「文明」という価値は、発端において非宗教的なものであり、エジプト遠征の時点でも、「文明」は信仰の問題とは切り離されていた。1830年以降、イスラーム世界の植民地化が切迫した課題となったとき、フランスはみずから「キリスト教文明」であることを、不意に思い出したかのような具合だった。この自覚は信仰生活や教会への回帰を誘発せず、ヨーロッパはむしろ固有の宗教を立脚点とする新たなアイデンティティの模索へと向かった。

その一方では、世界のあらゆる地域に対し圧倒的優位に立つ西欧が、唯一の生きた文明の頂点に身をおいて、オリエントの砂に埋もれた古の諸文明のなかに、自己の淵源を訪ねるという知の営みが、19世紀を通じて大々的に展開されていた。こうして学問としてのオリエンタリズムが1つの温床となり、セム対アーリアという構図を背景とする「人種主義」が醸成されてゆく。それは知の体系を装った、新手のイデオロギーだった。

啓蒙の世紀には、人類の全体が白人を頂点とするピラミッドを構成するとはおそらく考えなかったし、人種の優劣が植民地支配の権利を正当化するとは公言しなかった。博物学の具体的知識は、「文明化の使命」などという政治イデオロギーと結託しなかった。いっぽう『19世紀ラールス大辞典』の定義によれば「アーリア」とは、古代インドにおいて「黄色人種と黒人を支配した人種」にほかならない。

セムもアーリアも、本来は18世紀後半に、新興の学問であるオリエンタリズムのなかで、言語学的な範疇として形成された概念でありなが

ら、19世紀後半から20世紀にかけて、いわば恣意的に転用された結果、まぎれもなく「人種」の呼称となった。かつて異なる宗教を信じる者として排斥されたユダヤ人が、今や信仰の有無とは無縁な地平において、周到な科学的知見の荷担するイデオロギーにより、あらためて断罪された。

特にルナンを取り上げれば、ルナンの場合、ブルジョワ的な市民生活の価値観、国民国家の安泰、ヨーロッパの全世界に対する覇権、を矛盾なく統括して実現する、ヨーロッパ中心主義的なキリスト教文明論を提示した。セム対アーリアという対立軸のうえにオリエンタリズムのモデルを構築し、その結果人種イデオロギーの理論化にも荷担した。

(3)

次に評者が感じたことを書いておきたい。著者の姿勢は、サイドのようなオリエンタリズムについての議論を大前提としない。著者は、ある種の先験的な議論を排除して「ヨーロッパ文明」の意識の根底にあるものを明らかにしようとする。

本書を読んで評者がまず感じたことは、著者の読書範囲の広さである。検討の対象となるテキストは、フランス文学に疎い者を圧倒するような広がりを示す。小説としては、ヴェルヌ、フローベール、ベルナルダン・ド・サン＝ピエール、ルソー、ロティ、ディドロ、ユゴー、メリメ、バルザック、ブリュノ（ファイエ夫人）、シャトーブリアン、プーセント、セルバンテス、ネルヴァルの作品がある。小説以外の著作としては、シャトーブリアン、ティエリ、ギゾー、トクヴィル、ミシュレ、ゴピノー、ルナン、シエルシェールを取り上げる。

ただし、ヴォルテール、モンテスキューという思想家であり小説をも書いている人たちは、別の扱いとされているようである。フランス人

以外の人では、ウォルター・スコットが取り上げられる。とにかく多彩な顔触れであり、その人たち（ファイエ夫人を除き男性）の書いたテキストを著者は精力的に解読する。

テキストとして解読する文献以外にも多くの文献が登場する。著者が援用する著作をみると、フランスで刊行された多くの研究書、コンパクトな邦訳版も出版されたノラ編『記憶の場』など日本語版も出ている若干の本。また、日本人の手によるものをみると、本文中に使用されるものに限っても、安西信一、白石隆、川勝平太、谷川稔、佐藤彰一・池上俊一、羽田正、大貫隆・佐藤研（編）となる。処理されている情報の量は相当なものである。

さて、本書の「批判」という面について考えておくことにしよう。本書を池上俊一氏のように「徹底的にネガティブな『批判』」（『朝日新聞』6月15日付）と見る見方も出てくるだろうが、評者はそのようには考えない。確かに、1870年代までのフランスの言説に限定すれば、かなり批判的な評価であることは間違いない。ルナンについての叙述が特に象徴的である。ただし、著者の視点は、近代ヨーロッパ文明の全面的な否定に終始するものではないように思われる。

著者の基本的な姿勢は、「批判的な距離」と「第3の視点」である。第3部3章の「オリエントの叡知」と題する節に注目してみよう。「ヨーロッパのキリスト教世界だけが普遍的真理を保持する唯一の場だ」という思いこみが一方にあり、これに対して、そうではないかもしれない、と疑義をさしはさむ立場が他方にあるとして、後者の足場となるのが、『オリエント』と呼ばれるトポスなのである。言い換えれば「西欧を外側から映し出す『鏡としてのオリエント』」である。

つまり、著者は「異文化への同化を求めるの

ではなく、批判的な距離の導入をこころみる。」「じつはわたしたち自身がそのなかに取り込まれている『ヨーロッパ文明』の視点」を「他者の視点として相対化」する。かりに「キリスト教文明」と「イスラーム文明」の対立について語るとしたら、「第三の視点を立ち上げようと努めること」が「わたしたちのめざす『文明論』の姿勢」である。その立場は、評者としても理解できるものである。

本書は、「わかりやすい言葉で」書かれてはいるが、わかりやすく書かれてはいない。本としてのまとまりをもって読者に迫る時、決して読みやすいものではない。少なくとも文学に親しまない評者にはそう思える。ただし、読みやすすくない理由はそれだけではないように思える。

「文明論」という本書の設定する領域を、どのように考えるかということそれ自体が大いに議論の余地のある事柄である。その問題にここでは深入りすることはできないが、例えば、本書が主たる対象としている19世紀フランスの文化に関わる近年の研究書としては、杉本淑彦氏、竹沢尚一郎氏の著作がある（杉本淑彦『文明の帝国 - ジュール・ヴェルヌとフランス帝国主義文化 - 』山川出版社、1995年、竹沢尚一郎『表象の植民地帝国 - 近代フランスと人文諸科学 - 』世界思想社、2001年）。杉本氏の著者は、歴史学に、竹沢氏の著書は人類学に位置づけられると思われるが、両者の著書に比較して、本書は理解しにくい。

「文明論」には、ディシプリンが存在しないとしても、対象を定める中心軸のようなものが必要であろう。対象の広がりが違うので、全く同じ次元では議論できないが、杉本氏の著書には、ジュール・ヴェルヌの著作という中心軸が、竹沢氏の著作には人類学・民族学という中心軸

が存在する。本書の場合には、強いて挙げれば、「テキスト」ということになるうか。

その場合の「テキスト」であるが、取り上げられたテキストは、どのような基準で選択されたのか。代表的な著述家が並んでいることは認められるが、選択の基準が評者には理解できない。例えば、ルソーが登場するが、『新エロイズ』が取り上げられるのみである。著者が「文明」を問題にするならば、『人間不平等起源論』を取り上げる必要があるのではないかと、評者は考えてしまう。

さらには、著者の書き方にもなじめないところがある。対象が非常に大きいために、著者は自信に満ちた表現に終始している訳ではない。断定を避ける、別の表現をすれば自信のない書き方を多用する。「かもしれない」という表現が異常に多い。

本書は、「新しい学問共同体のなかで、今現在もつづけられている試みの、とりあえずの報告」ということである。「新しい学問共同体」が厳密に何を意味するのか、評者には理解できないが、「とりあえずの報告」という意味は理解できた。

なお、誤植と思われる箇所があるので、書いておきたい。

35頁、1838年（正しくは1938年）、98頁写真の説明、1915年（正しくは1815年）、208頁、1831年（正しくは1931年）、236頁、1899年（正しくは1799年）257頁、社会学（正しくは社会主義）

（工藤庸子著『ヨーロッパ文明批判序説 - 植民地・共和国・オリエンタリズム - 』東京大学出版会、2003年4月刊、xii + 426 + 47頁、定価7000円 + 税）

（さへき・てつろう 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）